

白山人類学

HAKUSAN JINRUIGAKU

13号 2010年3月

《特集》東南アジア海域世界の社会史再考
——サマ・バジャウ人の視点から——

Introduction

NAGATSU Kazufumi

Article

Neighbors to the “Poor” Bajau: An Oral Story of a Woman of the
Cebuano Speaking Group in Davao City, the Philippines

AOYAMA Waka

Research Notes and Data

Trepan and Lalipan: A Linguistic Note towards the Reconstruction of
Social History of Maritime Southeast Asia

AKAMINE Jun

Communities at the Edge: Pulau Banggi in Transition

JUNAENAH Sulehan and HAIR Abd. Awang

A Preliminary Spatial Data on the Distribution of the Sama-Bajau
Population in Insular Southeast Asia

NAGATSU Kazufumi

Special Lecture

Oral Histories and Traditions of the Sama Dilaut: Their Way of
Life in Sitangkai, Sulu Archipelago, the Philippines

HADJI MUSA S. Malabong

論文

「現地化」の多元性——マレーシア・サラワク州における
華人のファミリー・ヒストリーを事例として

市川 哲

世界遺産「熊野古道」における「文化」概念の再検討
——文化的景観「信仰の山」をめぐる理念と実践

山本 恭正

Hakusan Review of Anthropology

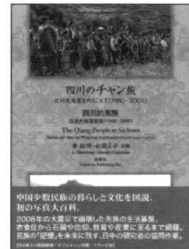
白山人類学研究会

アジアへの眼差し、アジアとの対話

四川のチャン(羌)族

汶川大地震をのりこえて(1950〜2009)

李紹明・松岡正子主編 中国少数民族の暮らしと文化を図説、初の写真大百科。二〇〇八年の大震災で崩壊した羌族の生活基盤。衣食住から石礮や信仰、教育や産業に至るまで網羅。貴重な民族文化を未来に残す、日中の研究者の協同作業。
ダブルトン印刷・カラー口絵付き。五〇四〇円



中国食事文化の研究

食台と作法の歴史人類学

西澤治彦著 中国料理は、その多様さのみならず、医食同源やマナーなどに中国人の生命観・世界観を映し出す巨大な文化複合である。本書は、特に食事の仕方に焦点をあてながら、中国食文化の体系を歴史人類学的に精緻に分析した貴重な論考。八四〇〇円



東シナ海祭祀芸能史論序説

野村伸一著 東シナ海周辺各地には今なお数多くの祭祀と芸能が行われている。朝鮮半島南部の巫女のクツ、沖縄の豊年祭、台湾の王爺祭祀、中国江南の媽祖信仰など、独自の光彩を放つ芸能の諸相。その共通の原風景を求め、著者渾身の集大成。三三〇〇円



韓国社会の歴史人類学

嶋 陸奥彦著 父系親族社会とされる韓国。それは、いつ、どのように出来上がったのだろうか。文献調査に基づく歴史・制度論的研究、実態調査に基づく現在の構造研究の相互横断的考察から、韓国における親族の実像を描いた大著。五二五〇円

好評既刊

●ブックレット「アジアを学ぼう」 第三期全四冊

⑬ベトナム「おかげさま」留学記 「異文化」暮らしのフィールドノート
川越道子著 ホストファミリーに溶け込み、何気ない日々を過ごす著者にとって、本当の異文化を理解するフィールドとは市民の中の日常生活であった。縁に感謝しつつ綴ったユニークな民族誌。 八四〇〇円

⑭法廷の異文化と司法通訳 中国籍被告人を裁く時
岩本明美著 裁判員制度により身近になった法廷。しかし、そこには法律以外に文化の壁が立ち、はたかたすることがある。日中の裁判風景を比較しながら、裁くことの難しさや意味を考える。 七三五四円

⑮社員力は「文化能力」 台湾人幹部が語る日系企業の人材育成
岸 保行著 現地長期勤務幹部からの聞き取り調査によって、初めて明かされた日系企業の人材育成のツボ。彼らの役割や能力を「文化能力」と定義することから見える、二世紀の管理術。 八四〇〇円

⑯自然保護をめぐる文化の政治 プータン牧畜民の生活信仰環境政策
宮本万里著 「環境にやさしい国」プータン。しかし、その政策の現場では、生態環境に寄り添って暮らしてきた牧畜民の伝統生活を脅かす矛盾を生んでいる。人間と環境を辺境から問い直す。 七三五四円

⑰風響社あじあ選書
⑰ペストと村 七三部隊の細菌戦と被害者のトラウマ
上田 信著 国家間の枠組み、ナショナリズムの連鎖から離れ、ペスト菌をまかされた村人の立場を歴史家として追跡。資料や証言から掘り上げた「真実」を出発点として描く、歴史と民衆との根本的齟齬。法の壁を叩く人びとの声を伝える。静寂のドキュメント。 一八九〇〇円

⑱風響社あじあ選書
⑱産む育てる伝える 昔のお産・異文化のお産に学ぶ
安井真奈美編 命の誕生という人間の営みで最も重要な場の問題が生じている。そこには現代社会の矛盾が端的に表れている。昔の、また異文化の出産を通して、「個人が」「病院で」「無事に」という固定観念をほぐす時、変革の歩が始まる。 一八九〇〇円

⑳開発の社会史 東南アジアにみるジェンダー・マイノリティ・境域の動態
長津一史・加藤 剛編 「開発」とは「一方向的」に「される」ものだろうか。インドネシア・メラシエ・フィリピンなどの周縁世界に起きたリアクションや変容に着目、相互作用とダイナミクスを克明に描き出す。 六三〇〇円

㉑宮座と当屋の環境人類学 祭祀組織が担う公共性の論理
合田博子著 宮座とその運営システムである当屋制は、入会山野から川ため池等を経て海に注ぐ水利配分の広域的な地域社会関係を調整するシステムでもあった。一〇年にわたる兵庫県の調査から、宮座研究の現代的意義を明らかにした画期的労作。 六三〇〇円

㉒長東の水上市民 珠江デルタ漢族のエスニシティとその変容
広沼さやか著 「蛋家」「水上人」と呼ばれた船上生活者は、今や陸地に定住し、漢族として暮らしている。彼らと「陸上漢族」との間に残る様々な「境界」に着目、沿海地域のエスニシティをダイナミックに描いた注目のモノグラフ。 五二五〇円

白山人類学

13号

2010年3月

目次

《特集》東南アジア海域世界の社会史再考——サマ・バジャウ人の視点から

NAGATSU Kazufumi	Introduction	1	
< Articles >			
AOYAMA Waka	Neighbors to the “Poor” Bajau: An Oral Story of a Woman of the Cebuano Speaking Group in Davao City, the Philippines	3	
< Research Notes and Data >			
AKAMINE Jun	Tre pang and Lalipan: A Linguistic Note towards the Reconstruction of Social History of Maritime Southeast Asia	35	
JUNAENAH Sulehan and HAIR Abd. Awang	Communities at the Edge: Pulau Banggi in Transition	43	
NAGATASU Kazufumi	A Preliminary Spatial Data on the Distribution of the Sama-Bajau Population in Insular Southeast Asia	53	
< Special Lecture >			
HADJI MUSA S. Malabong	Oral Histories and Traditions of the Sama Dilaut: Their Way of Life in Sitangkai, Sulu Archipelago, the Philippines	63	
<hr/>			
論 文			
「現地化」の多元性——マレーシア・サラワク州における 華人のファミリー・ヒストリーを事例として		市川 哲	71
世界遺産「熊野古道」における「文化」概念の再検討 ——文化的景観「信仰の山」をめぐる理念と実践		山本 恭正	93
研究・活動紹介			
「オープンシティ」におけるフィリピン・ムスリム ——アラブ首長国連邦の事例		渡邊 暁子	117
早稲田大学海外リーダー養成プロジェクト・イン・ボルネオの活動 ——マレーシアのフィリピン人移民とのかかわりを中心に		金田 尚子	125

HAKUSAN JINRUIGAKU

Hakusan Review of Anthropology

Vol. 13

March 2010

CONTENTS

Special Theme: Reconsidering Social History of Maritime Worlds in Southeast Asia: Perspectives from the Sama-Bajau

NAGATSU Kazufumi	Introduction	1
< Articles >		
AOYAMA Waka	Neighbors to the “Poor” Bajau: An Oral Story of a Woman of the Cebuano Speaking Group in Davao City, the Philippines	3
< Research Notes and Data >		
AKAMINE Jun	Trepang and Lalipan: A Linguistic Note towards the Reconstruction of Social History of Maritime Southeast Asia	35
JUNAENAH Sulehan and HAIR Abd. Awang	Communities at the Edge: Pulau Banggi in Transition	43
NAGATASU Kazufumi	A Preliminary Spatial Data on the Distribution of the Sama-Bajau Population in Insular Southeast Asia	53
< Special Lecture >		
HADJI MUSA S. Malabong	Oral Histories and Traditions of the Sama Dilaut: Their Way of Life in Sitangkai, Sulu Archipelago, the Philippines	63

Articles

ICHIKAWA Tetsu	Multiplicity of Chinese Localization: A Case Study of a Chinese Family History in Sarawak, Malaysia	71
YAMAMOTO Yasumasa	Reconsidering Concept of “Culture” in a World Heritage <i>Kumano Kodo</i> : Ideas and Practices over Cultural Landscape of “Mountain of Belief”	93

Research Activities

WATANABE Akiko	Muslim Filipinos in an “Open City”: A Case in the United Arab Emirates	117
KANEDA Naoko	Activities of “Project to Develop Overseas Volunteer Leaders in Borneo”: With Special Reference to their Concerns with the Filipino Migrants in Malaysia	125

白山人類学研究会

白山人類学研究会は、東洋大学社会学部社会文化システム学科の教員を世話人として組織されている。定例研究会は、原則として毎月第3または第4月曜日、東洋大学5号館で開催される。また、2007年度からは年次フォーラムを開催している。8～9月は夏休み、2～3月は春休みとし、研究会は開催しない。研究会の案内は電子メールを通じておこなっている。

連絡先：研究会事務局 hakusanjinrui@gmail.com

白山人類学研究会 2009年度の活動

□ 2009年4月20日第1回研究会

演題：マニラにおけるムスリム・コミュニティの社会形成と変容

発表者：渡邊暁子（東洋大学社会学部）

要旨：フィリピンは東南アジアで唯一のキリスト教国家である。そのなかで南部フィリピンに居住するムスリムは、1960年代末より武力を伴った分離独立運動を展開してきた。このため、従来のフィリピン・ムスリム研究の多くは、中央政府と対立する南部イスラーム勢力をめぐる諸問題を主題としてきた。しかしながら、戦禍を逃れ、国内外での経済的向上を求めてマニラに移動したムスリムは現在12万人を超え、もはや特定の領域内でその社会を捉えることが困難になっている。首都において政治的、経済的に重要な位置を占めるようになったムスリムに対し、その社会に関する研究は端緒についたばかりである。

本報告ではこうした研究動向をふまえ、マニラのムスリム・コミュニティを対象とし、国家のマイノリティとしてのムスリムの社会文化面での動態を理解することを試みた。具体的には、グローバルなムスリム・ネットワークとムスリム・コミュニティ形成との関連、ムスリムとキリスト教徒との日常的な交渉や関係、都市マイノリティとしてのムスリムの自己表象の戦略といったものを、フィリピン国家をとりまくマクロな社会経済状況の変化との相互作用のなかで、ムスリム・コミュニティの社会形成過程に位置づけ、考察した。

□ 2009年5月18日第2回研究会

演題：ヴェトナム・コホー族チル集団の社会構造とその変動過程

発表者：本多守（東洋大学アジア文化研究所）

要旨：本発表対象のチル集団は、モンクメール語族に属するコホー族の中の焼畑耕作民で母系制社会を形成する。発表では、最初にチル社会の社会構造を示し、次にフランス占領後、現在

に至る過程でチル社会が受けた外部の政治的経済的变化によって、変化する社会構造の変動過程を明らかにした。そしてその変動過程における婚姻連帯の変化に焦点を当て、リーチの姻戚関係に基づく社会構造理論と比較しながら新しい婚姻連帯拡大型モデルを提示した。

□ 2009年6月15日第3回研究会

演題：インドネシア高等教育の発展におけるイスラーム私立セクターの役割——1950年代～60年代のインドネシア・イスラーム大学（UII）とシュハダ・モスクに着目して

発表者：中田有紀（東洋大学法学部）

要旨：インドネシアの高等教育の機会拡大には、私立セクターが重要な役割を果たしてきたことが指摘されてきた。しかし、私立セクターが果たした役割とは、教育機会の量的な拡大に限定されるものではない。高等教育の質の充実・発展の支えとなる役割も果たしてきたといえる。本発表では、インドネシアの高等教育の発展に、イスラーム私立セクターが果たしてきた役割について、1950年代～60年代におけるジョグジャカルタの私立インドネシア・イスラーム大学とシュハダ・モスクに焦点を当てて考察することを目的とした。政治・社会の変化に対応しながらも、個人や財団などのプライベートなイニシアティブは、高等教育の発展を支えてきたことを明らかにした。

□ 2009年10月19日第4回研究会

演題：国際結婚女性の適応様相についての考察

発表者：キム・ミヨン（金美榮）（国立韓国国学振興院・責任研究委員、同附属「韓国儒教文化博物館」展示企画室長）

要旨：報告者は、国際結婚によって安東地域に定着した外国人女性たちが日常生活において適応していく過程を考察した。日常生活において外国人女性たちが経験する葛藤はなんだろうか、この葛藤をいかなる方法で乗り越えているのか、という問題を深層的に分析することを試みた。

*アジア文化研究所プロジェクト「境域アジアのトランスナショナル・コミュニティ：地域間比較研究の定礎に向けて」（代表：松本誠一）との共催

□ 2009年11月16日第5回研究会

演題：漁村の高齢者とその役割、高齢海女や漁師が働く意味——伊豆・下田市須崎地区の高齢者労働の事例より

発表者：齋藤典子（静岡県立静岡西高等学校、清水東高等学校非常勤講師）

要旨：本発表は、伊豆半島の海村・下田市須崎地区に住む漁民高齢者男女が日常行う労働が高齢者自身や家族、あるいは漁民社会にどのような役割をもたらしているのかを論じたものである。本発表で取り上げる伊豆半島は、明治期以降、昭和 50 年代まで、およそ 50 箇所では海人による貝の採取やテングサの採藻漁が行われてきた。近年、海女の高齢化や後継者不足から、多くの地域で海女によるテングサ漁が終焉を迎えている。しかし、高齢化率 32% を超える超高齢社会の下田市須崎地区では、今も 70、80 代の後期高齢者・海女によるテングサ漁が続けられている。さらに、テングサ漁を終えた冬季は、夫とエビ網漁を行う。つまり、70 歳を超えても夫婦ともに現役の漁師や海女として、海で働き続ける。

なぜ、須崎地区の高齢者は高齢になっても働き続けるのか。高齢者が働く理由は、経済的な要因や「生きがい」などの個人的理由に依拠するだけであろうか。須崎地区の高齢者漁民労働のフィールドワークを通して、明らかになったのは、地域の伝統的な漁民としての働き方が男女ともに体系付けられていることである。その背景には、地域の共有資源である共同漁場の利用というローカルコモンズ概念がある。本発表では、高齢者労働の背景、目的、役割、影響を地元に残る近世史料を用いながら考察をおこなった。

□ 2009 年 12 月 21 日第 6 回研究会

演題：民俗芸能の伝承と地域社会——三重県鈴鹿市内の獅子舞伝承を事例として

発表者：平山眞（鶴舞看護専門学校）

要旨：本報告では、三重県鈴鹿市肥田（ひだ）町における獅子舞伝承を主な事例として取り上げ、その概略を示しつつ、20 世紀後半からの大きな社会変動の中でのその変遷を辿り、地域社会と文化伝承の関係について論じた。

鈴鹿市肥田町においては、同町に鎮座する宇気比（うきひ）神社の春秋例祭において、獅子舞が奉納される。これには現在、小学生から約 50 歳までの男性 20 数名からなる獅子舞保存会のメンバがあたっているのだが、その伝承は 20 世紀後半における産業構造の変化や人口流動といった社会変動の波を大きく被り、一時は途絶、その後復活はしたもののその存続を巡って議論が関わされるなど、幾多の変遷を経てきている。ここでは、社会変動の中で幾度か廃絶の危機をくぐり抜けてきた獅子舞伝承が、何故に可能であったのかについて、そしてまたそこから何を読み取るべきなのかについて考察をおこなった。

ところで、報告者は、2007 年 3 月から 2008 年 9 月までの約 1 年半のあいだ同地に居住し、この地の住民の日々の営みを目の当たりにしてきた。また獅子舞保存会にも加入させていただき、獅子舞伝承の場である例祭前の 2 週間前後の練習に加わり、2008 年の春秋例祭でも獅子舞を舞うという機会を得ることが出来た。今回提示されるデータは主として、こうした実体験や、保存会メンバーからの聞き取りに基づいたものであった。

□ 2010年1月18日第7回研究会

演題：マン島におけるスポーツ文化の生成過程と社会的機能——スポーツボランティアの活動に着目して

発表者：小林ゆき（東洋大学大学院博士後期課程）

要旨：本研究は、1907年から続いているオートバイのモータースポーツ、マン島ツーリストトロフィーレース（以下、TT）の文化人類学的研究の一環として、スポーツボランティアの活動に着目し、スポーツ文化の生成過程と社会的機能について考察することを目的とする。

TTのコースは公道を利用するという性格上、選手と観客双方に対する安全管理や緊急時の救護のため、「マーシャル」と呼ばれる多数のスポーツボランティアを配置する必要がある。現在では2週間に渡るレース期間中、一周60kmのコースに約1600名から2000名を擁する。

フィールドワークと文献研究により歴史の変容と空間的側面から考察した結果、TTにおけるマーシャル活動は①レース時の運営に関わるだけでなく、スポーツ文化の発展に寄与している。②他者受容の文化が促進され世代交代が起こることで、組織の新陳代謝とレベルの向上が促され、持続可能な文化発生装置としての一端を担っている。③モータースポーツの空間を演出すると同時に、スポーツ文化の媒介となっている。以上が明らかとなった。

□ 2010年2月22日第3回研究フォーラム

Reconsidering Social History of Maritime Folks in Southeast Asia: Perspectives from the Sama-Bajau

オーガナイザー：長津一史（東洋大学社会学部）

本研究フォーラムでは、サマ・バジャウ人に焦点をおき、東南アジアにおける海民・海域の社会史をフィールドワークに基づく研究成果から再考することを目的とした。各報告は英語でなされた。フォーラムでは、フィリピン・スルー諸島在住のサマ・バジャウ人で、在地の知識人として自らの文化・歴史の研究に従事するとともに、長年にわたり多くの研究者の民族誌的調査をサポートしてきたハジ・ムサ・マラボン（Haji Musa Malabong）氏に特別講演をお願いした。また、ジャーナリストとして1980年代からアジア・オセアニアの海民に関する映像作品を多数、手がけてきた門田修氏（海工房）による映像プレゼンテーションも企画した。

*本研究会は「東南アジアの海とひと」第4回研究会との共催である。

フォーラムのプログラム、タイトル、発表者は、以下のとおりである。

—12:30～12:40—

Welcoming Remarks by Prof. Matsumoto Sei-ichi (Toyo University)

—12:40～13:00—

Introduction: Significance and Perspectives of the Studies on Maritime Folks in

Southeast Asia

Assoc. Prof. Nagatsu Kazufumi (Toyo University)

—13:00～13:30—

Attracted by “Poverty” : A Decade with the Bajau in Davao City, the Philippines

Assoc. Prof. Aoyama Waka (Hokkaido University)

— 13:30～14:00 —

Dynamics of Ethnic Relations on the Malaysia - Philippine Border: A Case of Bangi Islanders

Assoc. Prof. Junaenah Sulehan (Universiti Kebangsaan Malaysia)

— 14:10～14:50 —

*** SPECIAL LECTURE ***

Oral Histories and Traditions of the Sama Dilaut: Their Way of Life in Sitangkai, Sulu Archipelago, the Philippines

Hadji Musa S. Malabong (Sama Dilaut Cultural and Social Services Association)

— 14:50～15:10 —

Comments for the Special Speech

Prof. Terada Takefumi (Sophia University)

— 15:20～15:50 —

Tre pang and Talipan: A Linguistic Perspective on the Social History of Maritime Southeast Asia

Assoc. Prof. Akamine Jun (Nagoya City University)

— 15:50～16:30 —

Thirty Years of Maritime World in Southeast Asia

Monden Osamu (Studio UMI Inc.)

— 16:30～16:50 —

Review and Comments

Prof. Tachimoto M. Narifumi (Research Institute for Humanity and Nature)

— 16:50～17:30 —

Discussion

『白山人類学』投稿規定

1. 本誌の名称および目的

本誌は、日本語名を『白山人類学』、英語名を *Hakusan Review of Anthropology* と称し、白山人類学研究会の会誌として、会員による研究成果の発表およびこれに関連する情報・資料を提供するものである。本誌は年1回3月に刊行される。

2. 投稿資格

投稿は原則として本会会員に限る。ただし、編集委員会は非会員に対しても寄稿を依頼することがある。

3. 掲載原稿

原稿は、広義の人類学的な視点に立った研究成果を中心とする。その種類は、原則として以下のように区分する。

- a. 論文（研究成果の発表）
- b. 研究ノート（試論的な報告）
- c. 翻訳（日本語以外の言語による論文の日本語訳）
- d. 資料（フィールドワーク等に基づく一次資料、原典史料の提供）
- e. 書評（新刊書の書評）
- f. 資料紹介・研究活動紹介（公刊資料や研究活動、学術集会などの紹介）
- g. フィールド通信（フィールドワークの記録や短報）

a-c は 400 字詰め横書き原稿用紙で概ね 60 枚以内、d は 30 枚以内、e-g は 15 枚以内とする。いずれも未発表のものに限る。原稿には論文タイトル、投稿者の氏名、所属機関、所属機関、連絡先（E メールアドレス）、英語タイトル、ローマ字氏名、所属の英語名を付記すること。a および b には、200-500 語程度の英文要旨、日本語および英語のキーワードをつける。

4. 原稿の作成・投稿の手続き

- (1) 原稿の作成にあたっては、本誌の執筆要項に従うこと。
- (2) 使用言語は日本語または英語に限る。日本語については、できるだけ常用漢字・新かなづかいを使用する（英語論文の執筆要領等については、編集委員会に相談すること）。
- (3) 原稿は原則として MS ワードで作成し、フロッピーディスク等の電子媒体に保存の上、編集委員会に郵送する。電子媒体には執筆者名および使用ソフトのバージョン等を明記すること。
- (4) E メールに原稿ファイルを添付し、投稿することも認める（ただし(6)に留意）。
- (5) (3)(4)いずれの場合も、日本語タイトル、執筆者の氏名、連絡先、使用ソフトのバージョン等を必ず別紙の投稿票の様式に従って記載し、原稿とは別に「投稿票」ファイルに保存して、編集委員会に送付すること。投稿票は、白山人類学研究会ウェブサイト（下記 8「原稿の送付先・問合せ先」参照）からダウンロードすることもできる。
- (6) E メールに原稿ファイルを添付して投稿する場合も、かならず投稿票を編集委員会に郵送すること（Eメールの不通等による原稿受理のミスを防ぐため）。

- (7) ウィンドウズ標準フォントに存在しない特殊文字、または制御記号や文字飾りを使用する場合は、投稿時に編集委員会に相談すること。
- (8) 図、表、写真は、原則として原稿本体とは別に準備し、そのファイルを保存した電子媒体とあわせて、プリントアウトしたものを編集委員会に郵送すること。原稿採用後の図、表、写真の提出方法については、編集委員会が別途指示する。
- (9) 原稿（図、表、写真、フロッピーディスク等の電子媒体を含む）は、本誌への採否に関わらず投稿者に返却しない。刊行後しばらく保管した後、編集委員会で処分する。
- (10) 各号の投稿締切日は毎年10月31日とする。

5. 原稿の採否・最終原稿の提出手続き

- (1) 論文・研究ノートの採否ならびにその区分については、投稿、依頼を問わず、本誌の査読規定に従うものとし、原則として2名の査読者（レフェリー）による査読の上、編集委員会が決定する。原稿採用の条件として原稿の修正を求める場合がある。
- (2) 採用決定後は、プリントアウトした最終原稿および最終原稿のファイルを保存したフロッピーディスク等の電子媒体を編集委員会に郵送する。この際、前記の投稿票をプリントアウトし、最終原稿に同封すること。Eメールに最終原稿のファイルを添付し、送付することも認める。ただし、その場合も必ずプリントアウトした最終原稿および投稿票を編集委員会に郵送すること。
- (3) 著者による校正は、原則として初校のみとする。誤植以外の変更は、必要最低限にとどめる。加筆および訂正が必要以上に多い場合は、採用を取り消すこともある。

6. 原稿料の支払い等

- (1) 原稿料の支払いはしない。
- (2) 抜き刷りは、著者負担で作成することとする。

7. 著作権

採用原稿については、著作権のうち、複製権、翻訳・翻案権、公衆送信・伝達権（いずれも電子形態による場合を含む）を白山人類学研究会代表に譲渡することとする。

8. 原稿の送付先・問合せ先（2010年度）

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

『白山人類学』編集委員会

東洋大学社会学部 植野弘子（編集委員長） 山本須美子

E-mail: uenohi@toyonet.toyo.ac.jp/ yamamoto@s@toyonet.toyo.ac.jp

*Eメールに添付して原稿を送付する場合は、かならず双方あてに送信すること。

白山人類学研究会ウェブサイト：http://www.soc.toyo.ac.jp/culture/menu/hakusan_jinruigaku/body/index_hakusan_jinruigaku.html

9. 本規定の改廃

本規定の改廃は、白山人類学研究会運営委員の承認によっておこなう。

10. 附則

本規定は、2009年4月1日から施行する。

『白山人類学』執筆要領

はじめに

本誌の表記と体裁を統一し、多くの読者に読みやすいものとするため、この執筆要領に従ってご執筆ください。執筆要領の内容は主として論文および研究ノートの作成を念頭においでいますが、その他の原稿を作成する場合も、原則としてこの執筆要領に準拠してください。

1. 原稿の形態

- 1-1 原稿は原則として MS ワードで作成し、フロッピーディスク等の電子媒体に保存の上、編集委員会に送付する。電子媒体には執筆者名および使用ソフトのバージョン等を明記すること。
- 1-2 Eメールに原稿ファイルを添付し、投稿することも認める。
- 1-3 1-1, 1-2 いずれの場合も、日本語タイトル、執筆者の氏名、連絡先、使用ソフトのバージョン等を必ず別紙の投稿票の様式に従って記載し、原稿とは別に「投稿票」ファイルに保存して、編集委員会に送付すること。
- 1-4 Eメールに原稿ファイルを添付して投稿する場合も、かならず投稿票を編集委員会に郵送すること (Eメールの不通等による原稿受理のミスを防ぐため)。
- 1-5 ウィンドウズ標準フォントに存在しない特殊文字、または制御記号や文字飾りを使用する場合は、投稿時に編集委員会に相談すること。
- 1-6 図、表、写真は、原則として原稿本体とは別に準備し、そのファイルを保存した電子媒体とあわせて、プリントアウトしたものを編集委員会に郵送すること。原稿採用後の図、表、写真の提出方法については、編集委員会が別途指示する。
- 1-7 投稿原稿の MS ワードの設定は、A4版、横書き、余白：上下左右 30mm、一行の文字数：38字、行数：40行、行間：1行、フォントサイズ：11ポイント、用紙の端からの距離：ヘッダー・フッターともに 15mm とすること。
- 1-8 日本語は、章の表題、節の表題については全角 MS ゴシック、本文および脚注文については全角 MS 明朝を使用する。
- 1-9 ローマ字アルファベット・数字は、原則としてすべて半角 century を使用する。
- 1-10 英文要旨については、原則として英文校閲の専門家による校閲を受けたものを提出すること。なお、編集委員会が別途、英文校閲の専門家に依頼して、言語的修正をおこなうこともある。

2. 論文の構成

- 2-1 原稿は以下のような構成とする。ただし、翻訳、資料、書評、資料紹介・研究活動紹介、フィールド通信には、キーワードおよび英文要旨を付さない。翻訳の原文が英語の場合は、英語タイトルを重ねて記す必要はないが、原文が英語以外の場合は原文タイトルの英語訳を記す。
 - (1) 日本語タイトル
 - (2) 日本語氏名
 - (3) 日本語所属 (**大学**学研究科等)

(4) E メールアドレス

(5) 英語タイトル

*英語タイトルについては編集委員会の責任で変更を加えることがある。

(6) ローマ字氏名

(7) 所属の英語名

なお、最終原稿において所属は、氏名の末尾に上付きアスタリスク（、日本語氏名末は全角 MS 明朝、英語氏名末には半角 century）を付して、脚注ブロックにアスタリスク（半角 century）を入れ、半角スペースをあけて、所属のみを日本語で、続けて全角セミコロン（;）の後に、所属・住所/ Eメールアドレスを英語で記す。

例:

* 東洋大学社会学部 ; Department of Sociology, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo, Tokyo, 112-8606/ hakusantarou@toyonet.toyo.ac.jp

(8) 英文要旨 (200-400 語程度)

(9) 日本語キーワード (5 語前後)

(10) 英語キーワード (5 語前後)

(11) 本文

(12) 注

*脚注方式とし、各ページの下部に示す。

(13) 謝辞 (必要な場合)

(14) 参考文献 (見出しは「参考文献」とする。参照文献, 引用文献等としない)

(15) 図, 表, 写真は, 原則として原稿本体とは別に準備し, そのファイルを保存した電子媒体とあわせて, プリントアウトしたものを編集委員会に郵送する。本文中に挿入箇所を示しておくこと。図, 表, 写真についても, 電子ファイルの形式は, 原則として MS ワードによるものとする。他のファイル形式で提出する場合は, 投稿時に編集委員会に相談すること。原稿採用後の図, 表, 写真の提出方法については, 編集委員会が別途指示する。

2-2 章・節等の表記は, 以下のとおりとする。

(1) 章番号は, 半角ローマ数字 (I, II..., フォントは century) で示す。

(2) 節番号は, 半角アラビア数字 (1, 2..., フォントは century) で示す。

(3) 節以下を細分する場合には, (1)/1-1/1.1, (2)/1-2/1.2...などを適宜用いる (書式は統一すること)。

(4) 章, 節には数字だけではなく必ず表題をつける。ただし, 「はじめに」「むすび/おわりに」には数字をつけない。

(5) 章のローマ数字は, 全角特殊文字 (I, III, IVなど) を用いず, 必ず半角 century (I, III, IVなど) で入力すること。II, IV, IXなどは, I, V, Xなどの組み合わせで入力する (例: IVは “ I ” と “ V ” を組み合わせる)。

(6) 章と節の数字の後ろに点はつけず, 半角 2 文字分のスペースを入れて表題を記す。

(7) 章見出しの前と後ろの行にはそれぞれ 1 行分の空行を, 節以下の見出しの前の行には 1 行分の空行を入れること。

3. 日本語文章の表現

- 3-1 本論では、現代かなづかい（ただし引用文は原文どおり）を用いる。
- 3-2 字は新字体を用い（引用文の場合も）、難しい漢字はなるべく避ける。
- 3-3 接続詞、副詞、助動詞、代名詞はなるべくかな書きにする。
例：所謂→いわゆる 丁度→ちょうど 又→また、但し→ただし
- 3-4 繰り返しの記号のうち、かな文字の反復記号（ゝ等）は避け、漢字の反復記号（々）は用いる。
例：あゝ→ああ 人人→人々
- 3-5 句点はマル（。），読点はカンマ（，）を用いる。いずれも全角にすること。
- 3-6 漢字名以外の外国の人名・地名等はカタカナで表記する。必要に応じ、初出時にマル括弧内に原綴りを記す。
例：ギアツ（Clifford Geertz），サンダカン（Sandakan）
- 3-7 和文にかかる括弧（マル括弧，大括弧，キッコウ括弧等）は，原則としてすべて全角とする。
- 3-8 パソコンの機種依存文字は文字化けの原因になるので，できるだけ使用しない。たとえば，①は(1)，ⅢはIIIとする。
- 3-9 名詞を並列する場合は，全角カンマ（，），ナカグロ（・）を適宜，用いる。
- 3-10 引用文は前後にカギ括弧「」をつける。ただし，引用が比較的長いときには，改行してブロックとする。引用ブロックは左側全体を2文字インデントし，さらにその1行目を1字下げる。前後のカギ括弧「」はつけない。引用ブロックと前後の本文との間には1行分の空行を入れる。引用の直後に文献を指示する。引用文中の引用者補記は，キッコウ括弧〔〕に入れる。

4. 数字・年号

- 4-1 数字は，数値の表現には半角アラビア数字，概念の表現には漢数字を使用する。適宜，桁を区切る半角カンマ（，）をいれる。
例：1990年，3,120人，一流，第二次世界大戦
- 4-2 分数は，3分の1，20分の7のように示す。パーセントは%（半角 century）とする。
- 4-3 数の幅は半角ハイフン（-）を用いる。
例：3-6人，1880-90年
- 4-4 メートル，トン等の数値単位はカタカナ書きとする。
- 4-5 年号には原則として西暦を用い，必要に応じて日本の元号，中国暦，朝鮮暦，ジャワ暦，イスラーム暦などを併記する。
- 4-5 図，表は横書きを原則とする。番号および表題は，図／表，図／表番号（半角数字），半角スペース2文字，表題の順で記す。
例：図1 魚醬の分布

5. 参考文献

論文を書くために参照した文献ならびに引用した文献については，以下のように表記する。注をたてて表記することはしない。

5-1 文中の引用表記（以下の“=”は、実際には表記しない）

- (1) 全角大括弧（始）＝著者名（ファミリーネームのみ）＝半角スペース＝刊行年＝半角コロ
ン＝半角スペース＝参照／引用したページ数の範囲＝全角大括弧（終）とする（日本
語文献、英語等の文献いずれも同じ）。句読点は全角大括弧（終）の後に置く。

例:

…である [末成 1999: 387-389]。…といわれている [Watson 1985: 593-594]。

- (2) 論文集を参照／引用した場合は、(1)の様式で著者名にかえて編者名を次のように記載
する。日本語の文献であれば、編者名の後に「編」を付す。英語等の文献で編者が一人
であれば、著者名の後に“ed.”（または ed.に相当する当該言語の単語／略語）、編者が
二人以上であれば“eds.”（または eds.に相当する当該言語の単語／略語）を付す。

例:

[加藤編 2004] / [植野・蓼沼編 2000]

[Hefner ed. 2002] / [Hefner and Horvatic eds. 1997]

- (3) 編著者が複数の文献を参照／引用した場合は、編著者名を次のように記載する。日本語
文献については、ファミリーネームをナカグロでつなぐ。英語等の文献については、編
著者が2人であれば、編著者のファミリーネームを“and”（または andに相当する当該
言語の単語）でつなぐ。編著者が3人以上であれば、編著者のファミリーネームをカン
マでつなぎ、最後の編著者のファミリーネームのみ“and”でつなぐ。“&”は使用しない。
(4) 同じ文献の異なる箇所を表記する場合は、半角カンマ（,）で参照箇所を分ける。

例:

[末成 1999: 387-389, 404]

- (5) 異なる文献を同時に表記する場合は半角セミコロン（;）を用いる。

例:

[末成 1999: 387-389; 2005: 107; 山本 2005: 12]

- (6) *ibid*, *op. cit*, 前掲書などの表記は用いない。

5-2 参考文献一覧

- (1) 参考文献一覧は、本文または謝辞の後に「参考文献」として記す。記載するのは、本文
や注で引用したものに限る。著者名のローマ字アルファベット順または50音（あいう
えお）順で記載する。同一著者に複数の文献がある場合には、出版年順で文献を記す。
同一著者に出版年が同じ文献が複数ある場合には1987a, 1987bなどとして区別する。
(2) 複数の編著者の日本語文献を記す場合は、植野弘子・蓼沼康子（編）のように、編著者
名をナカグロでつなぐ。ただし、カタカタ書きの外国人名を含む場合には、吉原和男/
クネヒト・ペトロ（編）のように、ナカグロに代えて全角のスラッシュを用いる。
(3) 複数の編著者の欧米語文献を記す場合、第1編著者については、氏名を倒置させてラス
ト・ネーム、ファースト・ネームの順とするが、第2編著者以降については、氏名を倒置
させない（ただし本文中の引用では、編著者のすべてについてファミリーネームのみを
記す）。編著者が2人の場合、編著者名は“and”（または andに相当する当該言語の単
語）でつなぐ。編著者が3人以上の場合は、編著者名はカンマでつなぎ、最後の編著者
名のみ“and”でつなぐ。“&”は使用しない。

- (4) 日本語・欧米語以外の文献の記載法は、欧米語文献の例に準ずるが、著者名のファースト・ネーム、ラスト・ネームなどの配列は各言語の慣例に従う。
- (5) 雑誌名は原則として略語ではなく全て表記する。煩雑さを避けるために略語を使う場合は、略語一覧を参考文献表の冒頭に記す。
- (6) 副題は、原典の形式に関わらず、日本語文献の場合は全角ダッシュ二つ (——)，ローマ字アルファベット使用言語の文献の場合は半角コロン (:) で示す。

5-3 参考文献表の表記

(1) 雑誌論文の場合

〔日本語〕 著者名 (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 「論文タイトル」 = 『雑誌名』 = 巻 = 半角マル括弧 (始) = 号 = 半角マル括弧 (終) = 半角コロン = 半角スペース = 掲載ページ範囲 = 全角ピリオド

〔英語等〕 著者名 (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 論文タイトル = 半角カンマ = 半角スペース = イタリアック雑誌名 = 巻 = 半角マル括弧 (始) = 号 = 半角マル括弧 (終) = 半角コロン = 半角スペース = 掲載ページ範囲 = 半角ピリオド

例:

馬淵東一

1997 「高砂族の冠婚葬祭」『台湾原住民研究』2: 3-20.

Watson, Rubie S.

1985 Class Differences and Affinal Relationships in South China, *Man* 16: 593-615.

(2) 論文集に掲載されている論文の場合

〔日本語〕 著者名 (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 「論文タイトル」 = 『論文集名』 = 編者名 = 全角マル括弧 (始) = 編 = 全角マル括弧 (終) = 全角カンマ = 所収ページ範囲 = ページ = 全角カンマ = 発行地名 = 半角コロン = 半角スペース = 出版社 = 全角ピリオド

〔英語等〕 著者名 (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 論文タイトル = 半角カンマ = In = イタリアック論文集名 = 半角カンマ = edited by = 編者名 = 半角カンマ = pp. = 半角スペース = 所収ページ範囲 = 半角カンマ = 発行地名 = 半角コロン = 半角スペース = 出版社 = 半角ピリオド

例:

末成道男

1999 「ベトナムから見た漢族家族の特徴」『中原と周辺——人類学的フィールドワークからの視点』末成道男 (編), 387-408 ページ, 東京: 風響社.

Watson, James L.

1986 Anthropological Overview: The Development of Chinese Descent Group, In *Kinship Organization in Late Imperial and Modern China, 1000-1940*, edited by Ebrey, Patricia Buckley and James L. Watson, pp. 274-292, Berkeley: University of California Press.

(3) 単行本の場合

〔日本語〕 著者名(改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 『書名』 = 発行地名 = 半角
コロン = 半角スペース = 出版社 = 全角ピリオド

〔英語等〕 著者名(改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = イタリック書名 = 半角カン
マ = 発行地名 = 半角コロン = 半角スペース = 出版社 = 半角ピリオド

例:

末成道男

1983 『台湾アミ族の社会組織と変化——ムコ入り婚からヨメ入り婚へ』東京: 東
京大学出版会.

Freedman, Maurice

1958 *Lineage Organization in Southeastern China*, London: The Athlone
Press.

(4) 論文集の場合

〔日本語〕 編者名 = 全角マル括弧(始) = 編 = 全角マル括弧(始)(改行) = 発行年 =
半角スペース 2 文字 = 『書名』 = 発行地名 = 半角コロン = 半角スペース = 出版社 =
全角ピリオド

〔英語等〕 編者名 = 半角マル括弧(始) = ed (編者が一人) / eds (編者が二人以上)
= 半角ピリオド = 半角マル括弧(終)(改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = イ
タリック書名 = 半角カンマ = 発行地名 = 半角コロン = 半角スペース = 出版社 = 半
角ピリオド

例:

加藤剛(編)

2004 『変容する東南アジア社会——民族・宗教・文化の動態』東京: めこん。
植野弘子・蓼沼康子(編)

2000 『日本の家族における親と娘——日本海沿岸地域における調査研究』東京:
風響社.

吉原和男 / クネヒト・ペトロ(編)

2001 『アジア移民のエスニシティと宗教』東京: 風響社.

Hefner, Robert W. (ed.)

2002 *The Politics of Multiculturalism: Pluralism and Citizenship in Malaysia,
Singapore, and Indonesia*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

Hefner, Robert W. and Patricia Horvatic (eds.)

1997 *Islam in an Era of Nation-States: Politics and Religious Renewal in
Muslim Southeast Asia*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

(5) 再版された図書, 発行後に書籍に収録された論文を参照した場合

参照した図書の発行年を最初に記し, 半角マル括弧() 内に初版年を記す。必要に応じて
初版の書誌情報を入れる。

例:

馬淵東一

1974(1938) 「台湾高砂族の父系制における母族の地位」『馬淵東一著作集 第三卷』9-65 ページ, 社会思想社 (初版: 『民族学年報』1)。

(6) その他

- ・ローマ字アルファベット使用言語の雑誌名・書名は、イタリック体とする。
- ・文献の表示の最後には、日本語・中国語の場合は全角ピリオド (。), ローマ字アルファベット使用言語の場合は半角ピリオド (.) を付す。
- ・日本語, 中国語, ローマ字アルファベット使用言語以外の言語の文献の記載は、当該言語の慣習的な表記法に従う。

6. 注

- 6-1 注は脚注とする。文中で言及する場合は、必ず「注」と記す。「註」は使用しない。
- 6-2 注番号は1からおこし, 1)のように半角数字, 右側のみの半角マル括弧(終)で示す。フォントはcentury。注の数字とマル括弧は、本文中では注を付す箇所の右肩に上付きでつける(例: ~である¹⁾)。ただし脚注ブロック内の注番号は、通常のフォントサイズで記し, 上付きとしない。
- 6-3 投稿原稿における脚注ブロックの書式は任意とする。ただし, 採用後提出する最終原稿においては, 原則として脚注ブロック内のフォントサイズ, 段落とも本文と同様にする。
- 6-4 注は原稿枚数に含まれる。枚数の10%以内を注の分量の目安とする(たとえば50枚の場合は5枚以内)。

7. 図・表・写真

- 7-1 図, 表, 写真は, 原則として執筆者が作成したものをそのまま掲載する。本文中に挿入箇所を分かりやすく示すこと(例: 「→図1を挿入」)。
- 7-2 図, 表, 写真には, 通し番号をつける(例: 図1, 図2..., 表1, 表2...)。また, 番号だけでなく必ず表題またはキャプションをつける。
- 7-3 図および写真の表題(またはキャプション)は下, 表の表題は上に記す。
- 7-4 図, 表ともに作成の際に使用した資料・文献を「出典: **」というように明示する。写真の場合は, 撮影者を「**撮影」(または「出典: **」)というように明示する。

8. 歴史的呼称

歴史的呼称は当時の呼称に従い, 新字体・現代かなづかいで表記する。

9. その他の注意

ワープロソフトを使用する際には, 以下の点に注意して原稿を作成すること。

- 9-1 入力画面では区別がつかなくても, 印字するとその差が目立つ文字, 記号。
例: ー (長音) と - (ハイフン)
X (ローマ字のエックス) と × (バツ), 1 (数字) と l (Lの小文字)
- 9-2 日本語の文字および外国文字については, 原則としてウィンドウズXPで使用可能な文字で入力する。英語表記で用いられるローマ字アルファベット以外の外国文字, 別途インストールが必要なフォント, その他の特殊な文字・記号・フォントを使用する場合は, 事前に編集委員会に相談すること。

『白山人類学』査読規定

1. 目的

白山人類学研究会は、『白山人類学』の学術雑誌としての水準を確保するため、査読の制度をおき、その運営については編集委員会が責任をもつ。

2. 対象

査読制度の対象となるのは、『白山人類学』に投稿された原稿（編集委員会からの依頼原稿を含む）のうち、論文および研究ノートとしての掲載を目的とするものである。

3. 査読者

編集委員会は、投稿された原稿1編について、2名の査読者を選定し査読を依頼する。査読者の氏名は投稿者に通知しない。また、投稿者の氏名も査読者に通知しない。

4. 査読の過程

査読者は、主に下記の第7項に挙げられた項目について、査読対象の原稿を評価し、掲載に関する判定をおこなう。査読者は、原稿に修正を求める場合、修正すべき点について具体的なコメントを記さなければならない。査読者は、定められた期日内に、編集委員会に対して原稿の掲載に関する判定結果とその根拠を表明しなければならない。

5. 原稿の採択

編集委員会は、査読者の査読結果を十分に考慮・検討して、原稿掲載の可否を決定し、その結果をすみやかに投稿者に通知しなければならない。

6. 原稿の修正

再審査が必要とされた原稿の投稿者は、定められた期日までに修正原稿を編集委員会に送付しなければならない。この際、投稿者は、査読コメントに対する自らの改稿内容について、文書で説明を行わなければならない。編集委員会は、判定が「修正条件付き掲載可」の場合には、原稿の修正が適切になされていることを確認したうえで、原稿の採択を決定する。判定が「修正後要再査読」の場合は、改めて査読者に査読を依頼する。

7. 査読の項目

査読者は以下の項目などを念頭において評価、判定、掲載区分の判断をおこなう。

A. 内容の評価

- (1) 広義の人類学に関わる学術的研究に貢献しているか
- (2) 記述されている内容は正確か
- (3) 議論の展開は適切かつ論理的か
- (4) 資料および文献の取り扱いが適切か

B. 表現・形式の評価

- (1) 表題・キーワードは扱われている内容に即して適切か
- (2) 文章の表現は明瞭で読みやすいか
- (3) 全体の構成や章・節の見出しの立て方は適切か

(4) 図・表は有意に挿入され、かつ有効に使用されているか

(5) 参考文献の記載方法は適切か

C. 採択の判定

(1) 掲載可（修正を必要とせず、投稿時のまま掲載が可能）

(2) 修正条件付き掲載可（主に技術面に関わる微細な修正のみを必要とする。再査読はおこなわない）

(3) 修正後要再査読（再査読をおこなう）

a) 一部の用語，表現，パラグラフ等について，書き直しを必要とする

b) 一部の章または節について，書き直しを必要とする

c) 大幅な書き直しを必要とする

(4) 掲載不可（内容が本誌の目的に即していない，あるいは学術誌掲載の水準に達していないことが明白な場合の判定。査読者は，評価およびコメントにより，判定の根拠を示さなければならない）

8. 本規定の改廃

本規定の改廃は，白山人類学研究会運営委員の承認によっておこなう。

9. 附則

本規定は，2007年4月1日から施行する。

編集後記

2008年度に本誌の編集委員長を務めた植野は、09年度、サバティカルのため台湾に滞在していた。2009年度と同委員長の長津は、10年度、サバティカルのためインドネシアに滞在する予定である。編集責任者がこのような状況にあったこともあり、『白山人類学』第13号は、いささか慌ただしく準備された。数人の執筆者には、校正作業の際にご迷惑をおかけした。不手際は、すべて編集責任者の長津の責任である。ここに記してお詫び申しあげたい。

編集委員長が入れ替わるなか、腰を落ちつけて本誌の編集委員を務めたのが山本須美子会員と、2009年度から編集委員に加わった渡邊暁子会員である。第13号の刊行は、両会員に多くを負っている。

さて、今年度も本誌では〈特集〉を企画した。〈特集〉は、例年どおり、白山人類学研究会の年次研究フォーラムを軸に企画された。2009年度のフォーラム（第3回）は、*Reconsidering Social History of Maritime Folks in Southeast Asia: Perspectives from the Sama-Bajau* をタイトルとして開催された。フォーラムには、日本人研究者3人のほか、フィリピンとマレーシアからそれぞれひとりの研究者を招聘し、研究成果を報告してもらった。

わたしは、上記フォーラムのオーガナイザーを務めた。当初、発表者には、それぞれの報告に加筆修正する、あるいはその内容を展開させるかたちで、論文を執筆し、本号の特集に投稿してもらうことを企図していた。しかしながら、英語による論集をまとめるには、各報告者はあまりにも忙しすぎ、また時間も短かすぎた。海外から発表者を招聘するための準備に手間どり、フォーラムの開催じたいが2月にずれこんでしまったことが、後々ま

で影響した。結果、本号の〈特集〉における論文は一本のみになってしまった。

フォーラムにおける発表者はいずれも、長期のフィールドワークに基づいて東南アジア海域世界の社会史を再考しようとする、意欲的なプレゼンテーションをおこなった。それらを本号でまとめることができなかったのは、フォーラムの企画者として残念であった。各報告者が、あらためて本誌で論考を公表することを待ちたい。

本号には、特集号の論文のほか、2本の論文が掲載された。いずれも若手研究者からの投稿論文である。今後も、若手会員からの斬新な論文の投稿を楽しみにしたい。同時に、継続的なフィールド調査をふまえた中堅会員からの投稿も期待する。

ここ数年の白山人類学研究会では、2回に一度程度の頻度で新規参加者が発表している。発表希望者も増えつつある。研究会の活性化は、徐々に『白山人類学』の内容・質にも反映されていくことであろう。研究会の運営委員、編集委員は、研究会のさらなる活性化に努めていく。

(長津一史)

白山人類学編集委員 Board of Editors

植野弘子*	Ueno Hiroko*
長津一史**	Nagatsu Kazufumi**
山本須美子	Yamamoto Sumiko
渡邊暁子	Watanabe Akiko

* Chief Editor for FY 2010

** Chief Editor for FY 2009

『白山人類学』投稿票

記載日: 年 月 日

<small style="display: block; text-align: center;">ふりがな</small> 投稿者 氏名	
所属機関・職	

投稿の種類（丸で囲む）	論文 研究ノート 翻訳 資料 書評 資料・研究活動紹介 フィールド通信		
タイトル（日本語）			
タイトル（英語）			
本文の総枚数（英文要旨は除く。注は含める）	400 字詰 枚	図・表・写真 の有無と点数	有・無 点
使用したワープロソフトの種類（原則として MS ワード）、ソフトのバージョン、保存した電子媒体の種類、Eメールにより投稿した場合は送信した日付			

連絡先（所属機関、自宅のいずれでも可。住所と E メールアドレスは必ず記入すること）

住所			
電話番号（任意）		FAX 番号（任意）	
E メールアドレス			

* 投稿票は、白山人類学研究会ウェブサイト（下記）でダウンロードできます。

http://www.soc.toyo.ac.jp/culture/menu/hakusan_jinruigaku/body/index._hakusan_jinruigaku.html

白山人類学

第 13 号

定価：本体 2000 円 + 税

発行日

2010 年 3 月 31 日

編集：発行

白山人類学研究会

〒 112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学社会学部 松本誠一 気付

印刷

株式会社ワコー

〒 101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-54

TEL 03-3295-8011

FAX 03-3295-8083

発売

岩田書院 (Iwata Shoin)

〒 157-0062 東京都世田谷区南烏山 4-25-6-103

TEL 03-3326-3757

FAX 03-3326-6788

民俗文化の探究

谷口貢・鈴木明子編 A5判・426頁／12800円
倉石忠彦古稀記念論文集 演者と観客／祭りと信仰／民俗地図／語りの生成／民俗学の方法／民俗の発見。6部19本の論文を収録。(2010.05刊)

祇園囃子の源流

植木行宣・田井竜一編 A5判・592頁／14800円
風流拍子物・羯鼓稚児舞・シャギリ 前書『都市の祭礼―山・鉦・屋台と囃子』に続く共同研究の成果。系譜・展開と、画像資料の諸相。(2010.03刊)

風流踊とその展開

植木行宣著 2010.04刊／A5判・488頁／12800円
拍子物から風流踊への流れは、都市と村落という二つに分化したが、本書は村落的環境を背景とする流れを記す。(芸能文化史論集③：全3巻完結)

年中行事論叢

日次紀事研究会編 A5判・422頁／9500円
『日次紀事』からの出発 洛中洛外の年中行事を記録した『日次紀事』を読み込むことによって、京都の年中行事や習俗の本来の姿を知る。(2010.03刊)

諏訪明神 カミ信仰の原像

寺田鎮子・鷲尾徹太著 A5判・246頁／2400円
御柱祭などから諏訪信仰の歴史を捉え直し、その奥にあるミシャグジ信仰(自然霊・生殖力)を核とする実態を浮き彫りにする。(2010.03刊)

松浦さよ姫伝説の基礎的研究

近藤直也著／2800円 A5判・318頁
古代・中世・近世編 記紀・万葉から、近世の地誌・随筆まで、伝説の変容過程を解明。(2010.05刊)

簗簗傳 陰陽雑書抜書

久野俊彦・小池淳一編 2010.04刊
A5判・332頁 6900円
岩田書院影印叢刊10 会津の修験の家に伝来した中世に遡る陰陽書の写本2種を収録。解説・索引。

墓制の民俗学

前田俊一郎著 2010.02刊／A5判・404頁／9500円
死者儀礼の近代 近代の国家政策が墓制におよぼした影響や、両墓制の変化、社会集団と墓・祖先祭祀の再編など、墓制の動態からみた死者儀礼。

子ども集団と民俗社会

服部比呂美著 2010.02刊
A5判・392頁 8400円
サイノカミ祭祀や盆行事などにおける子ども組の位置付けや、出版物から子ども観の変遷をたどる。

小京都と小江戸

松崎憲三編 2010.02刊／A5判・268頁／5900円
「うつし」文化の研究 小京都としての山口・津和野、小江戸としての栃木・佐原、その狭間の金沢と磐田・掛川をとりあげ、その文化的特徴を考察。

写真保存の実務

大林賢太郎著 2010.01刊／A5判・128頁／1600円
プリント(印画)の保存方法を、最新の化学的データに基づいて具体的に示す。コンパクト解説と、カラー図版48頁収録。ブックレットA14。

劣化する戦後写真

全史料協編 2010.02刊／A5判・132頁／1600円
写真の資料化と保存活用 第I部は写真資料の初動調査の概略、第II部は保存・管理・活用する側の事例報告、第III部はQ&A。ブックレットA15。

河童の文化誌

和田寛著 2010.02刊／A5判・518頁／9500円
明治・大正・昭和編 河童を題材とする文芸作品と河童論や、絵画・演劇、河童関係団体の動向や世相などを、編年で紹介。著者のライフワーク。

湯治の文化誌

日本温泉文化研究会編 A5判・366頁／8400円
論集温泉学2 中世から近代まで、有馬・沼津・別府などの事例から、湯治の文化を考察した共同研究。〈温泉学へのいざない〉他も収録。(2010.05刊)



岩田書院

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山4-25-6-103【価格は税別】

TEL:03-3326-3757 FAX:03-3326-6788 <http://www.iwata-shoin.co.jp>

Hakusan Review of Anthropology

HAKUSAN JINRUIGAKU

Vol. 13 March, 2010

Special Theme: Reconsidering Social History of Maritime Worlds in Southeast Asia: Perspectives from the Sama-Bajau

Introduction

NAGATSU Kazufumi

Article

Neighbors to the “Poor” Bajau: An Oral Story of a Woman of the
Cebuano Speaking Group in Davao City, the Philippines

AOYAMA Waka

Research Notes and Data

Trepong and Lalipan: A Linguistic Note towards the Reconstruction of
Social History of Maritime Southeast Asia

AKAMINE Jun

Communities at the Edge: Pulau Banggi in Transition

JUNAENAH Sulehan and HAIR Abd. Awang

A Preliminary Spatial Data on the Distribution of the Sama-Bajau
Population in Insular Southeast Asia

NAGATSU Kazufumi

Special Lecture

Oral Histories and Traditions of the Sama Dilaut: Their Way of
Life in Sitangkai, Sulu Archipelago, the Philippines

HADJI MUSA S. Malabong

Article

Multiplicity of Chinese Localization: A Case Study of
a Chinese Family History in Sarawak, Malaysia

ICHIKAWA Tetsu

Reconsidering Concept of “Culture” in a World Heritage *Kumano Kodo*:
Ideas and Practices over Cultural Landscape of “Mountain of Belief”

YAMAMOTO Yasumasa

Hakusan Review of Anthropology

Hakusan Society of Anthropology, Toyo University